
甘く砕けた

testrip

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘く砕けた

【Nコード】

N5504E

【作者名】

testrip

【あらすじ】

婚約した女性と、二ヶ月経ってようやくその人におめでとうを言えた女性のお話。 あらすじでネタバレするのは私的クオリティ。一応、ガールズラブとっていますが、そうでもないような気がします。その辺は個人の自由。ってなわけでジャンルもその他です。タグは笑って見逃してください。

ヘイガール。
ヘイボーイ。
レディースアンドジェントルマン。

「何ぶつぶつ言ってるの」
「呪文」

これで一回目。
嘘を八百回吐いたら、願いが叶えばいいのに。
かといって八百回も吐けないけれど。

ソファで寝転ぶと肩がこるし、首が痛い。だけど、如何せん体が
だるくて寝転んでしまう。

ベッドに行けば？と言われるけれど、ここはアンタの家なんだから
気安く寝転ぶわけにもいかないでしょ。

昼下がりの蒸し暑いこの時間、皮のソファは少々蒸れるけれどそ
こは我慢だ。
パソコンに向き合って、カタカタと音を軽快に鳴らしながら彼女は
レポートってやつを書いている。

提出期限は近い、なのにどうしてあんなにも冷静に進められるのだ
ろうか。

彼女の図太すぎる神経を思って、私は少々怖くなりつつも頼もしく
思った。

提出の期限はちなみに明日だ。彼女はそれを今日からやり始めた。
私は昨日終わらせた、結構な時間をかけて、死にかけながら。

昔っから彼女は優秀だ。

「あっそ。コーヒー入れてきてよコーヒー。」二度も続けて言われなくとも分かる。はいはい。と返事をしつつキッチンへ向かう。

ブラックコーヒーを飲む彼女、ミルクや砂糖が入ると飲めない彼女。

ブラックコーヒーを飲めない私、ミルクや砂糖が入ると飲める私。ふむ。と何かに納得しつつ、私は彼女のマグカップにアイスコーヒーを注いだ。市販ではないそれは何だか彼女らしい。

コーヒーを淹れている時の彼女はいつも鼻歌なんかを歌っていて上機嫌だ。

白のマグカップに黒のコーヒーはとても落ち着く色合いで、そこにミルクコーヒーを注ぐには少し柔らかすぎる気がした。なんだか、ふにやっとしていて歪んでいる。

私のマグカップには、ミルクコーヒーが注がれた。砂糖も入っている、彼女にとっては甘いそれが。

スティックシュガーの袋を二つ、ゴミ箱に捨てて彼女の元へ運ぶ。一本半ではきつと少し苦い。

「へい、お待ちー」

「ありがとー」パソコンの方を向いたまま、彼女は礼を言った。

集中力が切れないってのは凄いな、と改めて思う。私なんかは二十分持てばいい方もしれない。

落ち着きの無い子だったわ。なんてお母さんの楽しそうな顔が浮かんできて笑ってしまう。

「どしたの」

「ん、何でもないよ」笑いながらそう言った。頭に手をぼんと乗せれば何よ。って言いながら彼女も笑う。

「ブラックでよかったよね」……「ちょっとした悪戯心つてやつだ。」

「うん、ありがとう」

もう一度頭を軽く叩いて、私はソファへ歩く。

閉め切ったカーテンは酷く閉鎖的で私は開けようとして、やめた。彼女を外へ晒すのが嫌で。

代わりに机の上にあったテレビのリモコンを手にとって、ソファに座る。まだ私の体温が残っていたみたいで生温い。

もうすぐ真夏、今は梅雨。クーラーつけないの？と訊けば、暑いかな？と返された。

私は暑がり、彼女は寒がり。

何もかもが真逆で少し寂しくも思うし、嬉しくも思う。彼女は私にとってとても新鮮だ。

コーヒーを少し飲むと、いつもよりほんの僅かに苦くて眉を顰める。彼女は気付くだろうか。

テレビをつけると何かのドラマの再放送だろうか、よく分からない音だけ流れていればいいと思ってチャンネルは変えない。彼女は音にまったく気付いてないようで、相変わらず頑張っている。

テレビの箱の中では、人が忙しく動いていた。

病院に救急患者が運ばれたらしい。白の病院が鮮烈に見えてしまった。

「ねえ」

「んー？」

声をかけると彼女は手を休めずに返事をする。

「美味しい？」

「フツー」

心此処に在らずなんて誰が考えた言葉だろうか。

フツー、か。心の中で反復させてみる。そりゃあ、いつも飲んでるもんね。ブラックコーヒーなら。でも。

箱の中を切り替える、ニュース番組は淡々としすぎていて感情を消すには十分だった。

違いに気付かないのは集中しているせいなのか、それとも彼女が変わったからなのか。

少なくとも、二ヶ月前の彼女ならこんなことにはならなかった。

「私が入れたんだから美味しいでしょー」

「はいはい、そうだね」

美味しいよ。嘘でも言ってくれる優しさが私を余計に惨めな気持ちにさせた。

余計な事を言うもんじゃないな。と溜め息を吐く。コーヒーを飲む気にはなれない、甘くないコーヒーなんて。

半分違うだけでこんなにも苦いとは思わなかった。人間の味覚がこんなにも優れているとは思わなかった。

苦さのせいで泣けてきた。

パソコンと睨めっこし続ける彼女は後ろの世界を知らない。

前を向いて突っ走る彼女は振り返らない。置いて行かれている感は否めない。

「婚約おめでとう」

呟いた先の世界は私にはどうも遠すぎて見えないらしい。

箱の中の音は鳴り続けているのに、キーボードを叩く音は消えた。

振り返らないで。

体温で蒸れるソファアがより一層湿気を帯びないように、私は顔をカーテンへ向けた。夕日が差し込まない部屋ではどうにも涙は乾いてくれそうにない。

私の名前を呼ぶ声と、駆け寄ってくる足音が近付いてくる。

もっと早く言うつもりだったんだ、おめでと違って。どうしてこのタイミングで言ったのか、分からないけれど。きっと私は祝福出来るはずだから。

「ありがとう」「やっと言ってくれた。そう言うあなたの声と腕の温もりのせいで、ソファアはもっとと湿るんだ。

カーテンを開けないのは、私の嘘が神様にばれないように。

『甘く砕けた』

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5504e/>

甘く砕けた

2010年10月21日20時29分発行